

伝統芸能の新しい潮流 —広島県の芸北神楽—

広島県における神楽の存在

広島県は全国で最も神楽が盛んな地域と言われており、神楽どころとして有名である。広島県においてどれだけ神楽が盛んであるかを示すアンケート結果がある。次の図1と図2は、平成14年度に広島県において行われた調査（平成14年度広島県政世論調査）結果の一部である。

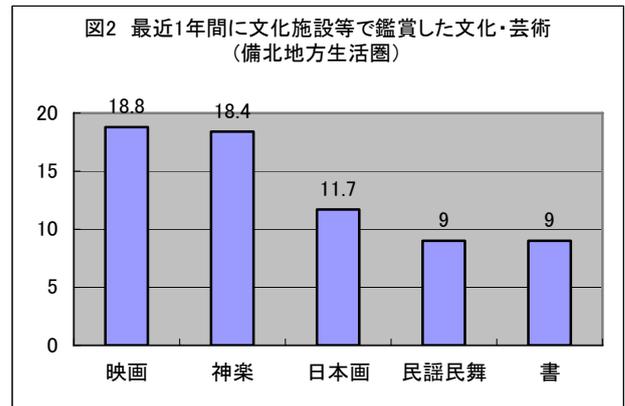
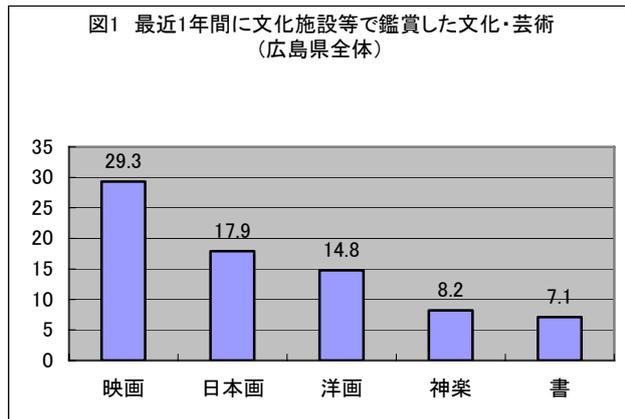


図1と図2は、「あなたがこの1年間に、映画館、ホール、美術館などの文化施設等へ出かけて鑑賞・見学した文化・芸術に関する催しは何ですか」と尋ねた結果（上位5項目のみ記載）を示したものである。図1から、広島県全体では、「映画」「日本画」「洋画」に続いて、「神楽」は第4位にランクされている。注目すべきは、図2の備北地方生活圏のみを中心とした結果である。ここでは「神楽」は18.4%で、第2位となっている。第1位は「映画」の18.8%、神楽とほぼ同じ数値（ほぼ5人に1人の割合）である。以上の調査結果は、どれだけ多くの県民が神楽に触れているかを如実に表しているといえる。

「神楽」と聞いたときに、一般的には「地味、ゆっくり、素朴」などの言葉を想起される方が多いのではないだろうか。しかし、その正反対の言葉、「壮麗、素早い、派手」があてはまる神楽が広島にある。その神楽は、「芸北神楽」と呼ばれ、大変な人気を集め、神楽ブームを巻き起こしている。

神楽ブームの最中であって、1998年7月、広島県美土里町に「神楽門前湯治村」がオープンした。この施設の入村者は、2004年6月末までに、102万人以上を数えた。神楽を観光資源とした施設を造り始めて、施設の飲料水調査のためのボーリングをしていた際に偶然にも温泉成分を含んだ水が出たそうである。結果として、神楽と温泉が融合した「神楽門前湯治村」が生まれ、これだけの入村者を集めることができたという。神楽門前湯治村は、温泉施設、宿泊施設、3000人収容の全天候型神楽ドーム、神楽資料館、神楽面の絵付けが体験できるコーナーなどがある。

神楽門前湯治村の神楽ドーム(NO.1)



この神楽ドームでは、冬季を除く週末に、町内 13 神楽団による神楽の定期公演が行われている。定期公演の鑑賞料はわずか 500 円なので、ここでは気軽に神楽を楽しむことができる。

危機を乗り越え、今に受け継がれる芸北神楽

芸北神楽という名前は、最初に芸北地方で盛んに行われていたことから名づけられた。現在は芸北地方以外にも広がっている。広島県では戦後から芸北神楽の競演・共演大会が行われるようになった。現在は、競演・共演大会、どちらも観客はチケット（2000 円～3000 円程度）を購入する。会場は、ほぼ満員になることが多く、チケットが SOLD OUT になることもある。また、驚くことには、良い席をゲットするために、徹夜組も登場するそうである。平成 14 年度の「広島県神楽競演大会」の観客は、なんと約 7000 人にもものぼった。

今日、隆盛を見せる芸北神楽だが、今日までの道のりは決して平坦ではなかった。第 2 次大戦後に芸北神楽は国家神道につながるものとして、外国の掣肘を受けた。神楽を奉納する際には、連合国軍総司令部（GHQ）に許可を求め、台本を検閲にかけなければならなかった。その当時、神楽を続けたいと考えた人々は、検閲局のあった九州・福岡まで上演許可願いを提出に行った。また、彫りの深い鬼面は欧米人をイメージさせる、演目の内容から欧米人を敵と見なして退治しようという思想につながるなどと指摘されることもあったそうである。

以上のような事情によって、神楽は改編を余儀なくされ、新作の神楽が生まれた。これが「新舞」と呼ばれる神楽の発祥の契機である。第 2 次大戦終了後に生まれた神楽を「新舞」、それ以前から存在していた神楽を「旧舞」と呼んでいる。旧舞と新舞は当然ながら台本内容が異なる。さらに、旧舞のリズムはゆったりとした「6 調子」であるのに対し、新舞はテンポの速い「8 調子」であり、新

舞では芸能性が強くなっている。

大太鼓、小太鼓、手打鉦、笛の楽人(No.2)



がく

旧舞と新舞は、以上のように台本やリズムは異なるが、舞を舞う「舞手」と太鼓などの楽を演奏

がくじん

する「楽人」がいることなど基本的な形態は共通している。

危機的状況を乗り越えながらも、神楽は現在まで伝えられてきた。新舞の登場により、神楽は多くの人の注目を集めてきた。その一方で、神楽本来の意味、「神を奉るために奏する歌舞」(大辞林・三省堂)、「五穀豊穰を祈願すること」、なども決して忘れてはならないだろう。

三位一体（舞手、楽人、観客）による楽しさ

芸北神楽の大きな特徴として、演劇的であることがあげられる。そのため、神楽団にとって最も重要視されるのは、「物語の情景がどれだけ観客に伝えられるか」ということになる。では、物語の情景を伝えるには、どのようなことが追求されているのか。舞手には神や鬼などそれぞれの役がある。楽は4つのパートに分かれている。これらの様々な部分がまとまる必要があるのだが、ただ単にまとまるだけでなく、それぞれが個性を発揮することも必要とされている。このような一見矛盾するような関係が成り立つことが、芸北神楽の楽しさを高める上で不可欠だという。

また、芸北神楽の楽しさを考える上で、見過ごすことができないのが、観客の存在である。舞手や楽人は舞うことや楽を演奏することによってのみ楽しさを味わっているのではない。多くの神楽団員は、「観客が拍手をしてくれたり、歓声とか掛け声とかをかけてくれると、乗れますね」と言う。熟練した舞を見せる神楽団の団長は、自分が役になりきった時、「お客さんと一体になっている感じがある。そんな時は自分がお客さんを乗せますし、お客さんもまた自分を乗せてくれる。舞手がお客を乗せ、お客が舞手を乗せる。これが繰り返されると快感です」と叙述している。本番の舞台で

は、舞手は 15 キロから 20 キロぐらいの衣装を身に付けることがある。それでも観客が盛り上がってくれれば、重い衣装を身に付けていても疲れはあまり感じないという。



そして、観客は神楽の情景にのめりこむ時を「別に何にもない、ほんとに何もない、ただほんとにそこがいい。そう感じた時は拍手も何もできなくて、引き込まれます。神楽は言い切れない部分があるから、楽しいと思います」と述べている。神楽を楽しむのは、舞台上の舞手や楽人だけではない。観客を含めた全ての人達が神楽の楽しさを享受できるかどうか重要なのである。

国境を超える海外公演

2003 年の 10 月に広島県千代田町の 4 つの神楽団からなる混成メンバーが、「レニングラード州ロシア・サンクトペテルブルク市建都 300 周年記念祭」に招かれた。その際、公演は 2 ヶ所で行われた。混成神楽団のメンバーは、10 月 16 日の夜にサンクトペテルブルク音楽院附属オペラ・バレエ劇場において、「八岐大蛇」・「紅葉狩」の演目を披露した。また、その日の午前には、小・中・高一貫の 583 番学校において「八岐大蛇」の一部を抜粋し上演した。その時の模様を、ロシアの新聞「イズベスチヤ」紙では、次のように伝えている。



今回は、大蛇の首を斬りおとす最終場面上演したが、大変見ごたえのある場面であった。まず、舞台上に楽人が登場する。楽人も出演者として重要な役割を担っている。笛の澄み切った音と太鼓の力強い音が全体の雰囲気盛り上げる。そもそも「神楽」とは、音楽の一種なのだ。音楽がやむと舞台の四隅から大蛇の首が飛び出してきて観客を驚かせた。生徒たちは本心から怖がっていた様子だ。このような場には慣れているはずの本紙記者さえも、大蛇が側に近寄ってきたときは平静を失いかけた。ぱっくり開いた口には鋭い歯がならび、眼は燃え上がり、ゆっくりとどぐろを解いて寄ってくるのだから・・・しかしこの恐怖は長く続かない。「勇者」が登場し、2本の刀で邪悪な大蛇の首を斬りおとすのだ。

おそらくロシアの方々にとって、「八岐大蛇」を観るのは初めてであったはずだ。だが、上記の紙面から、言葉や文化が異なるロシアの観客にも神楽の情景が確実に伝わっていることがわかる。ロシアの公演が成功裏に幕を閉じたことから、神楽は国境さえも超える底知れぬ力を秘めているのではと感じている。

最後に、筆者の未熟な文章力では芸北神楽の魅力をもっと十分に形ではか伝えることができなかったのではないかと猛省している。キレのあるしなやかな舞、爽快感あふれる囃子のリズム、そして会場に響く観客の歓声。これらは、どんな卓越した表現や、どれだけ多くの言葉を費やしても説明することは出来ないだろう。芸北神楽の真の魅力、やはりそれは実際にライブで体感していただくしかない。